

小児の腰痛

座長：山下敏彦・奥住成晴

パネルディスカッション 6 では、腫瘍、感染を含む「小児の腰痛」5 題が報告された。成人整形外科に比べて小児領域では、いわゆる「腰痛疾患」の罹患頻度は少なく、例年の本学会における報告例も少ない。

今回の報告のうち、第 1 席は椎間板ヘルニア、第 2, 3 席は腫瘍、感染で、第 4, 5 席はスポーツ関連の話題であった。

第 1 席は角谷整形外科病院・野村らの報告で、20 歳未満のヘルニアにおける臨床所見と手術所見（ヘルニアの性状）との関連をみたものであった。手術法は内視鏡下摘出術であった。従来言われてきたように、臨床的特徴として腰痛・下肢痛・SLRT 陽性は高率で、筋力低下、感覚低下は半数であったと述べた。“狭義の若年性”の特徴を検討するため、今後とも 15 歳未満の症例の集積が必要と思われた。

第 2 席は岡山大学の尾崎らの報告で、20 歳以下の脊椎腫瘍 11 例（転移性 1 例）が分析された。死亡例は 2 例（GCT, 転移性）であったが、Ewing 肉腫例は長期生存であったという。それぞれの腫瘍における占拠部位の特徴、類骨骨腫における有痛性側弯などの特徴が述べられた。迅速な診断確定と治療への移行が強調された。

第 3 席は福岡市立こども病院の高村らの感染性疾患の報告であった。診断は MRI が中心となるが、確実な診断のコツ、抗生剤を初めとする保存的治療のガイドライン、手術法の選択などについて報告された。

第 4, 5 席は早稲田大学スポーツ科学からの報告であった。金岡は腰椎分離症を中心とした「小児のスポーツに伴う腰痛」について報告した。この中で、腰椎椎間関節の構造的特徴や前弯増強など、関節突起間部の疲労骨折を生じやすい要因について述べた。分離症の初期における MRI の重要性、特に保存療法との関連について述べた。

鳥居は、関節突起間部の疲労骨折の発生を示唆する「腰部伸展ストレステスト」の重要性を強調し、サッカー選手の経年的観察から、疲労骨折の発生時期を推測している。腰部伸展ストレステストは、小学 4 年時より陽性例がみられると述べた。

全体討論として、小児における腰痛の頻度、診断・治療での留意点、スポーツに伴う腰痛の予防などの点を中心に討論された。

(文責：奥住成晴)